

藝文

第拾四年第四號

高山寺本類聚名義抄攷(一)

岡田 希雄

高山寺本類聚名義抄と云ふのは彼の古書を澤山傳へたので有名な山城國葛野郡梅ヶ畑村梅尾に在る眞言宗の古刹高山寺に嘗ては所藏せられて居つたのだが何時の頃よりか坊間に出てしまつたところの名義抄の一種で三寶類字集と云ふ名稱を持つた殘闕本を指して云ふのである。此の本は文政三年十一月伴信友翁が主として觀智院本名義抄に就いて精細な解題を物せられた際には未だ其の傳存して居る事すらも知られなかつた位であつたので

予嚮往梅尾高山寺見古本藏書目録

題三教聖目錄書
體古雅非凡筆

云三寶類字集一部六冊、蓋亦此書也

問之寺僧、答云、目錄所載之書、中葉
亡失者過半、類字集亦逸之、可恨

と其の亡逸を惜しむ歎息の聲を洩らされたものであるが、其の後如何なる契りがあったのか、翁は此の三寶類字集が全部では無くて一部分ではあるが幸ひにも傳はつて居つて、當時京師に住む某の秘藏するところとなつて居る事を聞き込まれた、即ち其の奇遇を喜び早速借り受けて子息信近に課して之を臨寫せしめ朱點に至りては親ら之を施しなほ叙文を書き添へて珍襲せられたのであつた。これ弘化二年十一月の事であつて翁が觀智院本を親しく見て、新寫本を作られた文化十年を去る事實に三十三年の後であつた。ところで此の翁の手澤本二冊は其の後轉々して明治四十三年三月に至りて我が京都帝國大學の有に歸し、現在では伴信友校藏書の一つとして附屬圖書館の架中に在るのだが、高山寺の印識ある古本の所在不明なる今日、われが此の信友翁手澤本に據つて其の古本の面影の大體を知り得るのは甚だ喜ばしい事と云はねばならぬ。

今翁の手澤本に據つて高山寺本名義抄の解説を物するに臨み先づ翁の叙文を全部引用する。蓋し此の叙文こそは翁が其の子息に此の本を臨寫せしめられた際の消息を物語る唯一の史料であるが爲めである。さて其の叙文は左の如し。

新寫三寶類字集叙

去今三十三年前文化十年予陪故君侯在京之日得摹古本類聚名義抄還江戶後復得類本二種殘缺以校本篇且記附言藏之然後予既致仕息信近嗣信近天保十三年

陪今君侯上京十四年春始家眷從到京故予復再在京適得見或人所祕襲三寶類字集高山寺印識古本殘缺一帖百五紙其本樣嚮所摹與名義抄全同而蠹壞亦自相同豈測乎是卽類聚抄附言所論高山寺聖教目錄載三寶類字集一部六冊所謂今逸之殘缺本也予再來京見其逸本實可謂奇遇而已并喜乞借卽欲摹寫之信近鑒其難堪以洗沐之寸隙臨寫漸卒業於朱點予親之裝潢爲二冊與名義抄相並珍襲焉他日欲校于本篇云爾
弘化二年十一月五日再在于平安城下二城官宅書伴信友時齒七十

又三

この文は翁の自筆であるが極めて讀みづらいと云ふのは元來清書せられたものでは無くて書き消しや書き添への多い下書きの儘の文であるが爲めである。さ程長くも無い此の叙文を淨書する位の勞をも取られ無かつたと云ふのは案するに或ひは餘りの高齢であつたが爲めに流石の翁も煩に堪へずして下書きの儘で捨て置かれたと云ふやうな事では無からうか翁は此の叙文を書いてから丁度一年後に無

くなつて居るのである。(此の叙文の反點や送り假字は全く翁の施された通りに従つたものであるが讀點は便宜上今自分が私見をもつて加へたものである。なほ「天保十三年」の下の虫損は五字が入るだけの分量にして置いたが、實の所、この虫損の所へ何字入るのやら一寸見當もつきかねるのである。蓋しこの所は年字の下に蠅頭の字で三行に亘つて何か書いてあるのだが、そこを連惡くも横に紙魚が食つたが爲め其の小字が不明になつたのである。だがどうやら五字位ありさうに想はれるので右の通りにした次第である。そして其の虫損の中に窮字の存する事だけは明瞭にわかつて居る。なほ文中の本篇と云ふ語は觀智院本を指し、又附言、類聚抄附言と云ふのは伴氏校本に添へられた翁の解説文を意味して居る。

二

高山寺本名義抄の解説をする爲めには、もと高山寺に傳はつて居つたところの古寫本を一見する必要があるのだが、何分其の古寫本は今日のところではまだ傳存して居るのか、それとも亡んで了つて居るのかも皆目わからない位であるから、どうしても伴氏手澤本に據つて解説せなければならぬ。ところが其の伴氏手澤本は翁自ら臨寫と云つて居られる以上は影寫で無い事は事實だが、虫損の痕までも精細に

書いてある所から察するに極めて忠實な臨寫であつた事が想像出来る、殊に寫し手が古書の謄寫や影寫に經驗のある信近であり其の上信友翁自身も親しく後で一通り目を通して居られるのだから觀智院本書寫の際の「一點隻畫不敢私増減」と云ふ態度は即ち、又高山寺本書寫の態度であつたとも云へよう、從つて此の本が高山寺の古寫本の面影を忠實に傳へて居るに相違ないと云ふ事は充分に認め得る、であるから古寫本が一帖であつたのを二冊に分つた——それも分冊して差支への無い所で分冊して居るのだから咎めるにも及ばないのである——點を除いては其の古寫本の姿を忠實に傳へて居ると考へて可い伴氏手澤本に據つて、今は見る事の出来ない高山寺の古寫本の事を説くのは不都合で無いと信する、

さて高山寺の古寫本は如何なる裝潢であつたかと云ふに翁が「一帖百五紙」と云はれたところを見ると觀智院の古寫本と同じやうに所謂粘帖綴であつたのでは無からうか、何かにつけて能く行き届いて居られた翁が、これに就いての説明を省略せられたのは残念であるが、若し今想像する通りに粘帖綴であつたとすると觀智院の古本や其の他の多くの同種類の裝潢の古本に準じて、用紙の質迄も大體想像する事が出来る。全部で百五紙あつて第一紙の表に「高山寺」と云ふ例の長方形の朱印が

捺してある。書物の名稱としては第一紙の表に「三寶類字集卷上」とあるが第三紙の表には「佛法類字集卷上」^一とあり又第五十一紙表に「佛法類字集卷上」^二と書いてある、こは此の高山寺本の殘缺は三寶類字集の中でも佛寶の卷に屬するものなるが爲めであらうからやはり高山寺本の名稱としては三寶類字集の方を採用すべきであらう。(書物の卷序を佛寶僧の三寶で次第して居るものに恰好の例が一つある、それは例の觀智院の開山として、又東寺の三寶の一人として有名な權僧都杲寶法印の著はした東寶記續々群書類從第十二宗教部所收であつて全部三卷が第一佛寶上、第二佛寶中、第三佛寶下、第四法寶上、第五法寶中、第六法寶下、第七僧寶上、第八僧寶下と云ふ順序で次第してあるのである。因みに云ふ、國語學書目解題に黒川春村翁の音韻考證が高山寺本を引用して三寶字類集と標して居ると云つて居るが、國語國文學研究室にある木村正辭博士舊藏の音韻考證卷之一十行目には高山寺本三寶類字抄とある。

觀智院本にある序は高山寺本には見えない、そして部首目錄も二書で少し相違がある、今其の相違を一目瞭然たらしめる爲めに二書の部首目錄を必要な所だけ掲げて見る。

(觀智院本)

(高山寺本)

類聚名義抄佛上 篇目

人 一 行 三 走 五 麥 六 一七

八 十九 身十

佛 中

耳 十一 女 十二 舌 十三 口 十四 目 十五 鼻 十六 見 十七

日 十八 田 十九 肉 廿

佛 下 本

舟 廿一 骨 廿二 角 廿三 貝 廿四 頁 廿五 影 廿七

手 廿八 木 廿九 犬 卅

佛 下 末

牛 卅一 片 卅二 豕 卅三 乙 卅四 几 卅五 牧 卅六

八 卅七 大 卅八 火 卅九 黑 卅 (凡 卅の火は光の誤りである)

(廿五の火、卅七の火は失し誤り也高山寺本の方正し)

大なる相違の存するのでは無いのだが小異のあるのは事實である。なほ

法佛人篇第一

報佛女篇第二

高山寺本類聚名義抄致

三寶類字集卷上

法佛人篇第一

一人 二 三 走 四 五 走 六 麥 七 一 八 九 十 身 十一 耳

報佛女篇第二

十二 女 十三 舌 十四 口 十五 目 十六 鼻 十七 見 十八 日 十九 田

應佛肉篇第三

廿 肉 廿一 舟 廿二 骨 廿三 角 廿四 貝 廿五 頁 廿六 影 廿七 長 廿八 手

化佛木篇第四

廿九 木 卅 犬 卅一 牛 卅二 片 卅三 豕 卅四 乙 卅五 几 卅六 尤 卅七 光 卅八 火 卅九 黑 四十 黑

應佛肉篇第三

化佛木篇第四

と云ふ各卷の名稱の第一字を集めると「法報應化」となるが、此の中の法報應の三字は云ふ迄も無く「法報應」の三身と云ふ事であらう、たが「化」が如何なる意味であるかは今の所未だ一寸思ひ附かない、然し何れにしても佛教の術語である事は勿論である。所で佛の卷の順序がかくの如く法報應化の四字で次第せられて居るのを見ると他の法僧の二卷も必ず此の種の方法で卷序が次第せられて居つたに相違ない事が斷言出来るが、かう云ふ事は名義抄の著者が法師であつたが爲めであつて、名義

抄全體を佛實僧の三字で次第するのと全く同じ遣り方である。
さて此のやうな部首目錄に引き續いて「佛實類字書畧頌」と云ふものが記されてある、引用して見るに

佛實類字書畧頌

人イ是亡走

麥一十身

耳女舌口目

鼻見日田肉

舟骨角貝頁

至長手木犬

牛片豸乙儿

牧八大火黑

と云ふのであるが、つまり佛の巻に見えて居る四十箇の部首を集めて五字づゝに區切りて偈頌の形式にしたものに過ぎない、何故かう云ふ事をしたのであらうかと云ふ事を考へるに、多分相互間の關係なきこれらの部首を無理に記憶せうとしてもそれは随分難義な仕事である爲めに、繙徒にとりてはお手の物の偈頌に仕組んで韻文體として暗誦の便を計つた物であらう。そしてかゝる遣り方は新撰字鏡か唯雜然と部首を配列して居るに過ぎないのに比較すると甚だ賢明な遣り方だとも云へるのであらうが、然し字鏡集が部首を天象部地儀部植物部動物部人體部等九部に分類して居るのに比べると全く問題にならない位に拙劣な遣り方だと云へると思ふ。

（觀智院本名義抄の序で著者自ら「立篇者源依玉篇」と云つて居るので、名義抄の部首の順序は願野王玉篇に基づくのでは無からうかと云ふ事を疑ふ人も或ひはあるかも知れないが、殘缺本玉篇真本の部首の順序と比較しさへすればかゝる疑ひは直ちに消散して了ふであらう）「立篇者源依玉篇」と云ふ八字の意味は玉篇の部首の順序を名義抄が襲踏したと云ふ事では無くて、名義抄は廣韻唐韻等の如く韻によりて文字を分類する事をせずに玉篇のやうに部首で分類をするのであると云ふ位の事で

あるらしい。」それにしても數多くて面倒な部首の記憶を便ならしむるために、誦特し易き韻文の形式に配列すると云ふかなり賢明な遣り方は一體誰が案出したものであらうか。名義抄の著者であつたのであらうか、それとも著者以外の人が案出して既に當時行はれて居つたが爲め著者はたゞ其のやうな便利な配列を採用したに過ぎないのであらうか。かう云ふ事を決定するには當然名義抄以前の字書の部首配列の順序を吟味すべきであるのだが其のやうな字書は新撰字鏡を除いては一つとして現存して居ない有様だから吟味をする事も出来ない、従つて部首を偶頌に仕組んだのが誰であるかに就いては單なる想像説を提示する事も不可能である次第である、但し自分は臆説として名義抄著者の創案であつたのではあるまいかと云ふ考へを抱いて居る、そして其の臆説の論據たるや極めて薄弱な物であるが其れは都合上本稿の終りの方で述べる事とする。さてこの偶頌は觀智院本には見えないものである。(但し第五卷卽法上卷を見ると水々言足立豆卜面齒山等の十箇の部首を掲げる場合に「爲頌曰」と云つて居る。そしてこれは蓮成院本に於いてもやはりさうなつて居る。)

次に高山寺本の本文の様子を述べると既に述べた通りに法佛人篇第一報佛女篇

第二應佛肉篇第三、化佛木篇第四の四卷に收められてある部首はそれ／＼觀智院本の佛上、佛中、佛下本、佛下末の諸卷と一致しない。又高山寺本の方は一紙の各半面を縦は四分、横は七分分して都合二十八箇の枠——其の枠は高山寺の古本では觀智院の古本と同じく必ず界により分たれて居たものであるから此の點も亦觀智院本が三十二明せらる可き單字や熟字を收めて居るのであるから此の點も亦觀智院本が三十二箇の枠に分たれて居るのと同じくは無い。更に又其の説明せられて居る單字や熟字も高山寺本と觀智院本とでかなりの相違がある、即ち文字配列の順序が異つて居つたり、注文に多寡があつたりし又注文の量は同じであつても其の記載の順序が

仕音止、ツカフ、ミヤツカへ、ツモム、ツカマツル (高山寺本)

仕音止、ツカフ、ツカマツル、ミヤツカへ、ツモム (觀智院本註二)

と云ふ風に相違して居たりする。又高山寺本には無いところの熟字が觀智院本に見えて居るかと思ふと、觀智院本では一つの枠を占めて居る熟字が高山寺本に於いては或る字の注文中に小さい字で記載せられて居たりして居る。と云ふ具合であつて校合の際に非常な苦痛を感ずるのである。

とにかく、右の通りであつて高山寺本と觀智院本との間には

(一) 書名の相違

(二) 各巻の名稱の相違

(三) 各巻に收載せられてある部首の相違

(四) 部首を偶頤にしたものゝ有無

(五) 序文の有無

(六) 本文の相違

の如き相違が存するのであるから自分には「其本○即高山寺本様嚮所纂與名義抄○即觀智院本 全同」と云はれた信友翁の心持ちが解せないのである。

三

さて此のやうな高山寺本と觀智院本との相違は果して如何なる原因から生じたものであらうか。かう云ふ事を考察する場合に普通に先づ胸に浮んで來る事は「ものゝく此の二種の本は同一の原本から出たものではあるが轉々書寫せられた際の誤寫脱漏に基く僅少の差が轉寫の度數を重ね行くにつれて愈々大きく成つて終にかくの如き結果を來したのではあるまいか」と云ふ事であるが、實はこれは他の場合ならばいざ知らず、今の名義抄の場合では首肯し難い説明であると思ふ。蓋し高山

寺本と觀智院本との相違は誰でも認める事であらうが極めて大きくあり、しかも其の相違と云ふものの中には、單字や熟字の配列の順序が一致しないと云ふやうな現象、即ち轉寫の際に生ずべしとは考へられぬものもあるが爲めであつて、自分は如何にしても此の二種の本の相違が轉寫に基づく物と認める事は出來ないのであつて、かゝる相違は元來から存して居るものである、つまり高山寺本と觀智院本とは同一の原本から出たのでは無くて種類の異つた二種の本から出たものであるが爲めにかゝる相違が存するのであると説明する事の妥當であるのを確信する。換言すれば名義抄の著者は名義抄を完成する爲めに少くとも二種の草稿を物した、そして其の著者自筆草本の中の一方を寫し傳へたものが高山寺本の系統の本であり、他の寫本を寫し傳へたものが觀智院本の系統に屬する本であらうと確信するのである。

さてかく論じて來ると當然こゝに高山寺本と觀智院本との先後は如何と云ふ問題に觸れなければならぬ事になるのだが、自分は高山寺本の原本の方が觀智院本の原本よりも前に脱稿せられたものである事を確信する、そして其の理由とするところは左の如くである。

- (一) 高山寺本には序文が無い、これが第一に注意を要する點である、蓋しこゝに人あり

て徐々に一書を増補訂正して完成し行く徑路を想像して見るに、若し初めの稿本に序文があるならば彼は後の稿本に於いても其の序を襲踏して書き添へるであらう、もしその序が拙なれば訂正した上で掲げる事もあらう、だが是れに反し、折角書き添へた序文をば後になつて棄てゝ顧みないと云ふやうな事は萬々あるまい、若し其の序文なるものが其の書を編述する際の方針主義と云ふやうなものを示した凡例風の物であるならば、彼が其の方針主義を變更しない以上は如何して其の序を書かないで置くやうな事が出来ようか。所で觀智院本に見えて居る序文と云ふのは實は序文と云ふ可きもので無くて當に凡例と云ふ可きもの此の事は藝文第十三年第四號初版の編輯中に既に述べて置いたである。そして高山寺本と觀智院本との間には編輯上の主義方針に於いて何等の變化も無いものであるから此の凡例とも云ふ可き序は觀智院本に書かれてある以上は高山寺本にも書かれて然る可きである、ところが事實はさうで無くて觀智院本には立派に書かれてあり乍ら高山寺本には見えて居ないのである、で此の序が見えて居ないと云ふ以上は高山寺本の方が觀智院本に後れて出来たものとは到底云へない、觀智院本に先き立つて出来たものと解釋せずには居られないのである、つまり換言すれば此の序は高山寺本の出来た當時には未だ作られて無かつたもので、其の後にな

つてから草せられたが爲めに觀智院本にも添へられるやうになつたのだと解釋するの外は解釋の方法が無いのである。(尤も高山寺本に序文の见えて居ないのは著者自身若しくは後の轉寫者の不注意から書き漏されたのだとも見られるかも知れないが、併し卷中又は卷末の所に書かれてあるならばいざ知らず、かゝる卷初に堂々と記載せられてある序を寫し漏す程の粗忽者はよもやあるまいと信せられるのでかゝる疑ひは問題にはならぬ。又序文の書かれてあつた卷首の一二紙が高山寺の古寫本が無名氏によりて謄寫せられた以前に於いて既に切れて失せてしまつて居たのだとも解釋出来ない事はないが、それは根據なき臆說であるからこれ亦問題にもならない。一步譲りて、序文が高山寺本にも曾て存して居つた事を認めるにしても、此の本が觀智院本よりも前に出来たものであると云ふ事は、引き續き次ぎに述べるやうな理由から明言出来ると信するのである)

(二) 觀智院本では其の序文の中に「墨聲者和音也」と云ふ事が書いてある位であるから和音に關して深い注意が拂はれて居るのであるが、高山寺本では全く正反對であつて殆んど和音に關する注意が拂はれてないと云つて可い位の狀態である。即ち全部で百五紙の中で和音と云ふ事の見えて居るのは、自分の氣が附いたところでは

唾 吐臥反和タ

(觀智院本_二オニ_一)互 口鄧反和音コウ (同 右_二セウ_一)

の二例がある 見落しも多分あるであらうのみであつて觀智院本に和音何、和何とあるものは高山寺本では大方「音何」若しくは「又音何」と云ふ風に注されてある、例は擧げるにも及ぶまいと思ふが少々参考の爲め掲げて置く。

右は觀智院本
左は高山寺本

一ノ二 位 和井
音井一ノ一 德 和トク
音トク一ノ二 倍 和ヘイ、ヘ
又音ヘイ一ノ一 往 和音リウ
又音リウ一ノ二 僕 和ホク
又音ホク一ノ一 後 和コオ
又音コオ一ノ五 伺 和受ン
又音受ン一ノ二 行 和キヤウ
又音キヤウ一ノ一 借 和者ク
又音者ク一ノ二 衢 和又去
又去一ノ二 偽 和クキ
又音クキ一ノ二 道 和道ウ
又音道ウ一ノ一 健 和見
又音見一ノ二 迫 和ハク
又音ハク一ノ一 供 和クウ
音クウ一ノ三 万 和マン
又音マン

又觀智院本に注意せられてある和音が全然高山寺本に記入せられて無いものも甚だ多くて量で云へば今述べたものと匹敵する位ある、これも参考の爲め僅少の例を

引くに止める、蓋し徒らに紙面を塞ぐに過ぎないが爲めである。

一ノ二	以	和イ	一ノ四	何	和カ
ウ八			ウ一		
一ノ四	付	和平	一ノ四	伺	和平
ウ六			ウ八		
一ノ四	休	和ク	一ノ八	偷	和チウ
ウ一			ウ一		
七ナ一	假	和ケ	一ノ二	徧	和ヘム
ウナ			ウ三		
一ノ一	得	和トク	一ノ二	羅	和ラ
九オ一			三オ二		
九ウ一	復	和フ、フク	一ノ二	遙	和エウ
			四オ八		

要するにかくの如くであるから高山寺本では和音に就いては全く注意が拂はれて無いと云つても可い位であつて、此の一事からでも高山寺本の方が観智院本よりも先きに出来たものなる事が考へられるであらう、蓋し和音に關して特に深い注意を拂つて居る観智院本の後に出来た本に於いては、一層深い注意が拂はれる事があつても其の反對に、和音に關する注意が撤回せられると云ふ如き矛盾が敢てせられる筈が無いからである。

(三)右に述べた事とよく似た現象が發見せられる。それは如何なる事かと云ふと観智院本では、或る字の音を假字又は假字に準すべきもの

例へば火ン、者ウの如き物を云ふ

で示す場合に

右傍にVかくの如き記號を附する事が屢あるのだが——如何なる意味が此の記號に含まれてあるかと云ふ事はかなり查べて見たけれども未だに考へ得ないのである——高山寺本では其のやうな例は無い。かう云ふ事も今の和音の場合と同じく、高山寺本が早く出来て其の爲めに此の記號の附せらる可き音に關する細い注意が未だ行き届かなかつたものであると解釋し、觀智院本は後で出来たが爲めに其の種の注意が周到に拂はれる事も出来たのだとでも説明しなければ説明の方法が無いものである。

(四) 人籍のところに以字を掲げ其の次ぎに以字を持つ熟字として所以を掲げて

所——ユヘ コノユヘニ (所字の下は以字の代り) 是以コ、ナモテ (りに用いた記號である)

と注して居る高山寺本をば

所——ユヘ コノユヘニ 是 コ、ナモテ

とある觀智院本 オーノ三 に比較して見るとこゝに面白き事實の存するのを認める。一體「是以」と云ふ語 觀智院本に於ては是字の下に以字が無いがそれは脱落した物であらう は云ふ迄も無く所以と云ふ語とは意味も異つて居るもの故、これが所以と同じ意味の語でもあるかの如くに取扱はれて所以の注文中に小字で記入せらる可きもので無い事は明かである、もう少し詳しく云ふと

所以と是以との間には元來本文と注文との關係と云ふ如きものが存するので無く、二者ともに同等の價值を有して對等の關係に居るものであるから、是以は所以の注文中に置かれて食客の如き待遇を受ける可きで無く、當然觀智院本の如く所以と同じく一つの杵を占む可きである。然るに高山寺本では是以は恰も所以の注文であるかの如く記されて居る、これは穩當な書き方では無い、それに反して觀智院本の方は穩當である、そして一般に不穩當不完全なものが整理補訂せられるのが自然の順序であるから、高山寺本の方が觀智院本よりも先きに出來たと見る外はない。

さてかゝる例は未だ外にも少しばかりある。

(イ) 觀智院本^{一ノ五}では「俯仰^{〇注}俛^{文略}——フシアフグ端^{ヒダサモムキ}——」と云ふ順序で記されてあ

る「端仰」が高山寺本では俯仰の注文中に出て居る。

(ロ) 觀智院本^{一ノ一}では「傳^{〇注}之^略——沓^{シリフ事}——キダナシ」となつて居るが高山寺本では「——沓」が傳の

注文の中に見えて居る。

(ハ) 觀智院本^{七ウ三}で「上^{〇注}以上^{文略}——己^{カムツカタ}——向^{マハリアク}——ミアクレハ」とある中の「己上」が高山寺

本では「以上」の注文中に記されてある。

(ニ) 觀智院本^{二ノ一}では「娜^{〇注}——娜^{文略}——タヘム——タタヘ」となつて居る「——娜」が高山寺本では

婿字の注文に記入せられて居る。

(ホ) 観智院本^{一ノ二三ウ}八では一つの枠を占めて居る「磯道^{ヤマノカケヂ}」「聞道^{イフナラク}」の

二つが高山寺本では「治道^{ミチハリ}」の注文中に書き入れられてある。

(五) 観智院本に見えて居ながら高山寺本には出て居ない熟字が少し見受けられる例へば観智院本^{一ノ一}九を檢すると往字が出て居り往字に引き續いて往字を伴うた熟字が九箇

往^{〇注} 以^往 已^往 昔^者 同^日 同^古 既^乃 同^ナ ト
交略 イニシヘ ムカシ サキ ムカシ 同 同 同 イニシヘ 同 ナ ト

と云ふ風に掲げられてあるが高山寺本に於いては「既」だけが缺けて居る。そしてかくの如き現象が存する以上は、「既往」のある観智院本の方が、此の二字の見えてない高山寺本よりも後で出来たものと見るが穩當であらう。かやうな例を氣がついただけ舉げて見る。

(イ) 観智院本^{一ノ一}三に「人^{〇注} 一人^{ヒトリ} 二人^{フタリ}」とある「二人」は高山寺本には見當らない。

(ロ) 観智院本^{一ノ四}三に何字を伴ふ熟字の一つとして見えて居る「奈^ナ 讒^{カン}」は高山

寺本には見えぬ。

(ハ) 観智院本^{一ノ七}には代字の熟字として「代々^ヨ」と云ふのが出て居るが高山寺本には無いものである。

(ニ) 観智院本^{七〇二}に「遊^{○注}翰^{ナトリ}」とある遊翰は高山寺本には出て居ない。

(ホ) 観智院本^{一ノ三七〇八}に「一^{○注}箇^{ヒトツ}心^コ、ロサモハラニス^ス不^ユ、一^ツ巻^{マキ}第^{ダイ}一切^{イツ}アマキシ」である「一切」は高山寺本に見當らぬ。

(ヘ) 観智院本^{七ウ}に「下^{○注}以下^{シモツカダ}已^イ而^ニ同^{ドウ}直^{チキ}トミオロセハ無下^{ムケナリ}」とある中の已下、無下の二熟字は高山寺本には見當らない。

(ト) 観智院本^{八〇二}に「所^{○注}無所^{セムスヘナシ}所以^{ユヘ}山^{ユヘ}因^同」とある無所所由、所因は高山寺本に見えず。

(チ) 観智院本^{八〇三}に「互^{上腰、タカヒニ}更互^{タカヒニ}差^{カタチカヒ}相^{タカヒニ}折^{ツツラナリ}」である「互折」は高山寺本に見當らぬ。

(リ) なほ観智院本二卷八丁右三行に見えた「阿姑^{サハ}祖^{サバ}外^{シツトメ}」又三十四丁右七行の「踰跳^{アシツラ}」三十五丁右八行の「睚眦^{メクラム}」五十三丁右六行の「黄泉

山寺本には見えない熟字どもである。

(又) 觀智院本一部三九ウハの終りの方は「寄生ホヤ 寓生同 西ニシ 丁寧ネムコロ 面ムカフ、ソムク 不

能アタハス—克同—尅同」となつて居るが高山寺本を検すると寓生までは見えて居

るが其の後のものは見えて居ない。

(ル) —部の終りのところは觀智院本一ノ四では「卽スナハチ 辛カラシ 一メゴフ 一コト」音聲

「音聲有聲」となつて居るが高山寺本では辛字以下は見えないのである。

(六) 高山寺本十篇のところを見ると去字が掲げてあつてさて其の去字から七棒隔つ

たところに前の去字とは没交渉の状態で「去來ユキ、タル」と記されてあるが觀智院本

一ノ四では「去文略以去去來ユキ、タル」と云ふ風に書かれてあるから去字の熟字として去

字と關係を有して居るものなる事が直ちに首肯せられる。そして此の去來と云ふ

熟字の記載の仕方は高山寺本觀智院本の何れが穩當であるかと云へば云ふ迄もな

く觀智院本である。ところで繰返し云ふ通りに不穩當な書き方が訂正せられて穩

當な書き方となると云ふのが普通の現象であるのだから従つて高山寺本觀智院本

の中の何れが早く出來たかと云ふ事は容易に見當がつくであらう。

今述べたところの「去來」と極接近して記載せられてある「平在」と云ふ語も觀智

院本一ノ四では「在文略自一」ワガマママナリ 在一 トコロ 平一 タにラケク アキラカニス」と云ふ順序になつて

居るから極めて自然であるが高山寺本では「在○注去來イリ、エキ、タル自在ワカマ、ナリ在々トコトコ」となつて居つて、在字とは無關係で不必要な「去來」が書かれて居るのに却つて「平在」は見えて居ない、そして其の肝心な「平在」は豈計らんや、五行後のところに前後の文字とは全然没交渉の状態で載せられて居り、しかも「平在」とは無くして亂暴にも「平一」とさへ成つて居る、言語道斷とでも云ふの外批評の言葉も無き遣り方である。

「𦍋耳アラウツノチ」は高山寺本では耳字と關係の無い所に、即ち取字と聯字との間に、耳字とは獨立して記載せられてあるが、是れは穩かな書き方と云へない、やはり觀智院本ニノ一の如き順序で記されてなければならぬ。

又女字の熟字も觀智院本ニノ一には「女○注少女ナトメ女人メナヤメ潛カツギメ遊行ウツリ兒コ

カレメ一云アソビ 歌女ミ、ス 醜シゴメ 織コ、メ 天探タナハタツメ 天アマノサクメ 俗アマノサクメ とあるから何等申し

分が無いが高山寺本では女字の次には唯一つ女婦メナメと云ふ語があるのみで他の少女等の語は八九枚も後に見えて居る、これも穩かな書き方とは云へない。(因みに云ふ女婦メナメと云ふ語は觀智院本には無くて其の代りに姁婦メナメの二字をヲトヨメと訓んで居る、そして觀智院本が此の二字をヲトヨメと訓んで居るのは和名抄に比較すると

明かに娣婦（妹）と取り違へたものと思はれるから、オトヨメに當てる漢字としては女婦よりも却つて娣婦の方が幾分かましの如く考へられる。

高山寺本一篇のところに「五音年イッ、一者イツ、オバ向マバリアケ上○注文以ーカムヅカダと

ある中の「向ー」は一寸見ると「向五」と云ふ語であるかの如くに見られるが實は然には非ずして云ふ迄も無く「向上」の事である、だから「向上」が上字の上に記載せられ剩さへ上字が略せられて「向ー」と云ふ形で載せられて居ると云ふ事は全然意味をなさないと云ふ可きである、どうしても観智院本セウノ三の如く「上以上已ー向ー」と云ふ順序で書かれなければならぬ。かう云ふ風に書かれてある時にこそ始めて「向ー」が「向上」であると云ふ事が想像出来るのである、高山寺本の如き書き方ならば如何にして「向ー」が「向上」なる事を考へる事が出来よう。

高山寺本では人篇の所で第一番に佛字を掲げ、次に人字を掲げてきて人字を伴うて居る熟字を、一人五人、人等、湯人、眞人、漁人、海人、人魚、盗人、不良人、桃人、人參と云ふ順序で十二箇記し、其の次に「仿カタヒク、音方、ナラフ、イカール、オホツカナミ、ホノカナリ」と云ふ熟字を擧げて居るのも亦亂暴な遣り方である、蓋し人字に關係ある熟字を多く掲げた直ぐ次に「仿ー」と云ふ風に書いてある以上誰しも「仿ー」は「仿人」と云ふ事だと考へるであらうが實はさうで

は無くて「仿」は「仿佛」と云ふ語であるが爲めである。兎に角「仿」と云ふ書き方は沙汰の限りである。

(七) 今述べた如く高山寺本では人篇の部類に属する字群の最初の字が佛字であるが是れも又注意を要する事である。一體名義抄のやうに文字を部首によつて分類して居る字書では同じ部首で一と纏めになつて居る文字群の最初に擧げらる可きは部首その物でなければならぬであるから少々の異例はあるにしても新撰字鏡や字鏡集等は、大抵さう云ふ風になつて居る、そして名義抄も觀智院本では第九卷爪部を除くと後は皆部首が第一に擧げられて居る、で此の人篇のところの如きも人字が最初に位して居るところが高山寺本では佛字が最初に來り其の次に人字が記されて居る。さて今此の二種の本に見えた二種の記載の順序に就いて其の先後の問題を考察するに觀智院本の如き當を得た正しい記載の順序が、不自然で不合理な高山寺本の記載の順序となるであらうと云ふ事は想像せられないが、不穩當な高山寺本の順序が訂正の結果穩當で自然的な觀智本の如き順序となるであらうと云ふ推測は合理的な推測として首肯せられる。それ故に自分は此の人篇の文字の中に於ける人字佛字記載の順序唯一つからでも、高山寺本が先きに出來上り、やがて觀智院本が

出来上つたと云ふ事を認容しなければならぬ。(何故高山寺本では佛字が最初に來て居るのであらうか、もとより其の眞の理由が明確に成り得るとは豫期しないが、私に按ずるに著者が緇徒であつたが爲めに、文字通りの「あが佛の尊さ」から佛字を何より先きに掲げたものではあるまいか。)

(八) 高山寺本に比較すると觀智院本では訓が少しばかり乍らも増して居る、例へば遣字の訓は高山寺本には

イタル、アタフ、シタカフ、クハフ、ハナル、アマル、ウシナフ、ウツス、トモシ

とあるだけであるが觀智院本^{一ノ二}八^五にては

ノコス(ル)、ワスル、スツ、アフス、オクル、ツクス、ト、ム、イタル、アタフ、シタカフ、クハフ、ハナル、ウシナフ、ウツシ、トモシ、アマル

の十六訓が擧げられてある、つまり高山寺本の九訓に比較すると七訓増加した事となる。かやうに澤山増した例は他にも一寸見つからないが一訓若しくは二訓が増加して居る例ならばかなりにある。そしてかくの如き現象の由つて生ずる所以を考察するに、觀智院本の方が高山寺本より後に出来たが爲め、従つて訓の量も増したのであらうと思はれる。今かう云ふ類のものを左に列挙する、丁数は例の通り觀智

院本のものであり、訓は即ち高山寺本に所見が無くて、観智院本に見えて居る物である。なほ序であるから、字鏡集の丁数も必要のあるものは、参考の爲めに掲げる。そして「無」と書いてあるものは、其の訓が字鏡集にも見えないものである。

一ノ五 杭 カタキ (一〇ノ一)
 〇六 俯仰 ノタマフ (六ウ四無)
 一ノ五 倂 アツシ (一〇ノ四)
 〇六 倂 ナラフ (一〇ノ三)
 一ノ九 倂 ニクム (一〇ノ三)
 〇二 倂 ウレシ、オムカシ (一〇ノ九)
 一ノ二 倂 マタスル (一八ノ二)
 一ノ六 倂 エクサキ (一八ノ八)
 一ノ二 倂 テハル (一八ノ二)
 一ノ二 倂 オクル (一八ノ二)
 一ノ二 倂 ノトル (一八ノ二)
 九ウ六 進 ノトル (一八ノ二)

高山寺本類聚名義抄致

一ノ二 微 チマタ (一八ノ一)
 〇四 微 タチマタホル (三ウ三無)
 一ノ二 徧 徧 タチマタホル (一八ノ一)
 〇七 徧 マトヒス (二〇ノ四無)
 一ノ二 馬道 ミチ (一八ノ二)
 一ノ二 迅 トフ (一八ノ二)
 一ノ二 迅 キス (一八ノ一三ウ二に)
 一ノ二 迅 シケシ、ナ、メ (一八ノ九)
 一ノ二 迅 ナヒジ (一八ノ九)
 一ノ二 迅 エラフ、メクル (一八ノ二)
 一ノ二 迅 アナル、カサル (一八ノ三)
 一ノ二 倂 ネタム (一八ノ三)
 一ノ二 倂 ケガス (一八ノ五)
 一ノ二 倂 フ、ク (一八ノ五)

藝文

- 一ノ三 一 オナシ (一八ノ四九オ二、但し)
 七オ八 一 サウ (サウの方はサチとあり)
 八オ二 所 ミチ (六ウ四無)
 一ノ四 中 ノヒス
 〇ウ三
 一ノ四 甫 オホシ
 〇ウ六
 一ノ四 幸 ノソム (一八ノ三)
 二ウ二 (四オ二無)
 一ノ四 去 マカル
 二ウ三
 一ノ四 直 スクム
 二オ五
 一ノ四 有 アルイハ
 三オ二
 一ノ四 躬 マタ (一ノ一オ四)
 三ウ一 (二スリとあり)
 二ノ五 好 ウルヲシ (一〇ノ三)
 〇七 (三ウ一)
 二ノ三 盼 ミルマタ、ク (一ノ二六ウ一)
 三ウ四 (但ミルは無し)
 二ノ三 瞿 オツ、ミル (一ノ二ノ一)
 四ウ二 (〇オ二)
 二ノ三 眇 イヤシ (一ノ二ノ一)
 六オ二 (八ウ一)
 二ノ四 鼻 ハナノサカル (一ノ一五)
 〇オ八 (五ウ一)
 二ノ四 視 ノヅム (一ノ九ノ二)
 一オ五 (二オ四無)

- 二ノ一 腰 ナク
 五オ六
 二ノ一 呷 ノミハク
 六ウ一
 二ノ一 瞶 ムマイナ、ク
 六ウ七
 二ノ一 瞶 ムカフ
 七オ三
 二ノ一 瞶 トグ、ツキメ
 八オ一
 二ノ一 瞶 タマヒ
 八ウ四
 二ノ一 和 アヘ物
 六オ五
 二ノ二 听 シラフ
 五ウ三
 二ノ三 瞶 ヒシク、フサカル、
 三オ七 ホノカ、ヒソカニ
 二ノ四 昇 (一ノ一ノ一)
 四ウ二 (ウ一無)
 二ノ四 昔 サカル (一ノ一ノ九)
 五オ三 (オ三無)
 二ノ四 肝 クル (一ノ一三ウ四)
 六オ七 (但しヒクル)
 二ノ四 暴 タケシ (一ノ一ノ一)
 八オ一 (一ウ三)
 二ノ四 是 タツ (一ノ一ノ二)
 六オ四 (六オ二)
 二ノ四 昌 アサシ (一ノ一ノ一)
 三ウ二 (五ウ四)

三ノ四 晶 ヒル (一ノ二)
 一ノ五 穂 カス、イタ、ク
 一ノ五 昏 クル

(七ノ三六リ四、但し
 イタ、クの方は無し)

八ノ四 曜 ヒカル (一ノ八)
 二ノ四 暝 ヨル (一ノ二)
 八ウ八 暝 ヨル (三ノ三)
 二ノ五 的 サダム (一ノ七)
 二オ七 的 サダム (三ノ二)
 (無四)

高山寺本類聚名義抄攷(二)

岡田 希雄

四

右に述べたところの八類以外に未だ違字の注文の如き例もある。此の違字は觀智院本^{三ノ八}には「音皇ミヤクイトマ、イム、ヤム、ユク、タクマシ」とあるのだが外に「音皇」とある右下即ち「ミヤク」の右傍に「重點上ニツ、ケタリ」の九字があり又「タクマシ」の下にも「又唐には訓^一及^二」と云ふ注文があり何れも如何なることを意味するのか不明であるが此の中「重點上ニツ、ケタリ」の方は著者が書き加へたものでは無くて後人の加へた竄入では無からうかと云ふ疑ひも生じないでも無いが「又唐ニハ訓^一及^二」の方は眞違ひも無く著者其の人の筆と見る可きであらう。ところが高山寺本を檢すると「音皇イトマ、ヤム、イム、ユク、タクマシ」と云ふ注文が三行に互つて書いてあり「イトマ」とある右傍に「、、、アク」と云ふ不可解な事が書いてある外は今舉げた「重々云々」「又唐ニ

ハ云々の二注文は見えて居ないのであるが、これなども高山寺本の方が先きに成り
 觀智院の方が幾らか後れて出来たものである事を物語つて居るのでは無からうか。
 (因みに云ふ、觀智院本に「ミヤク」とあるものに相當する注文が高山寺本では「、、ア
 ク」と成つて居るのを見ると、「ミヤク」はどうも「、、アク」の誤りであるらしい「、、こ
 は點と點との間隔を近づけると片假名字のミとなるし、又アとヤとはこれ又烏焉馬
 の誤りの起り易き文字なのである、さてかう云ふ事情が幾分明かに成つて來ると觀
 智院本の「重點云々」と云ふ注文の意味もおぼろげ乍ら判つて來る、多分重點と云ふの
 はその「、、」とあるのを云ふのであらうと思はれる、即ち觀智院本ではミ字になつ
 て居るがこれは誤りで重點とするのが正しいのだと云ふ意味かと考へられる、若し
 此の想像にして大過無いならば「重點云々」の注文は著者の筆とは見られない事にな
 る。字鏡集一九ノ四には「タクマシ、イトマナク、イソク、イトマ、イム、エク、ヤム」の七訓あるだ
 けで「ミヤク」に相當する注文が無いので従つて重點云々の意味も徹底的に明かにす
 る事出来ないのは遺憾である。

又高山寺本に「觀×上正職 下俗」とあるもの符號の所へは至を篇にし見字を旁にした字が入るも觀智院本二ノ四では「觀正必觀男曰 巫胡狄切女」

曰×俗となつて居る。

又如字の熟字は觀智院本ニウでは

如○能久如イクビサ、未—イマタ、ニ 疋—スルツミ 不—シカアラス

奚イカム 何—同 如是カクノゴトク

とあつて久如如是の二語を除くと何れも如字を省略して縁で示して居るが但し奚如の場合に限り縁が落ちて居る、西念寺本にはある、高山寺本は未如疋如不如久如奚如何如如是と云ふ風に一つ／＼に如字を書いて居る、これも高山寺本は先きに出來たから一々如字が書いてあるのだが觀智院本は後に出來たから如字を書く手数を省いたと見る可きであらう。なほこれらの熟字は高山寺本では如字の説明のあるところから九枚後に如字とは無關係に記載せられてあるが觀智院本では如字の直ぐ後に引き續いて記載せられて居る、これも高山寺本の如き書き方即ち如字と其の熟字とを切り離れた書きの方の不穩當なるに氣附いた著者が後で訂正したものであらうか。

兎に角右に述べたやうな理由からして自分は高山寺本の原本であつた名義抄の稿本の方が觀智院本の原本であつた所謂作者自筆草本よりも先きに出來た事を信ずるのである。

五

然るにこゝに右に述べた結論と矛盾するが如き事實も存する。例へば、人籍の字の條を見ると高山寺本に於いては「海人」と「盜人」との間に「人魚イナリ」と云ふ一項があるが是れは觀智院本には見えないものである。所で既に云つた通りに書物と云ふ物は著者が手を加ふれば加へる程其の量が増大して行く物である、もとより冗漫に過ぎた記事が刪削せられて簡約になる事もあるから一概には云へないが、併し、簡單にして説明の不十分な所が訂補の結果精細にして餘すところも無いやうに成るが一般の實際的傾向である、殊に其の書物が名義抄の如き字書である場合には、一稿二稿三稿と云ふ風に稿が何度も改められると其の改められる度数に應じて其の書中に採集せられたる文字なり語彙なり注文なりが増補せられるのが普通の現象である、そしてかくの如き一般の傾向を唯一の論據として、高山寺本の出來たのが觀智院本よりも以前である事を論定したのであるが、今やこの人魚の例の如き全く反對の現象を示すものが現はれたのである。しかもかゝる例は唯に此の一つのみでは無いのである、左に其の例を擧げる。

聊字は觀智院本ニノ三には「音料」とあつてイサ、カニ、シハラク、タノシ等の八訓を載

せて居るが高山寺本では「音料の上になほ玉篇云力彫反」と云ふ注文が見えて居る。
又媒字の注文中にも高山寺本には觀智院本ニノ八に無き「玉云音梅也」と云ふ五字が見えて居る。

俚字の注文は觀智院本四ノ五には「卓音明俗掉字徒予反ヲホキナリ」とあるが高山寺本には「卓音明俗掉字徒予反今云不審オホキナリ」とあつて今云不審の四字が多い、そして此の四字は西念寺本にもやはり見えて居るのである。

觀智院本九ノ一に後字を掲げ次に「以後ノチ」と云ふ熟字を記しさて後字とは全然沒交渉の字を四字飛んで「已」同「向」ユクサキ「ユクスエ」と二つ熟字を擧げて居るが何れも「已」字向字の下の子——それは何れも同じ字でなければならぬ——の代りに略號を使用して居る以上其の略號に相當する字が直ぐ上に在る可きである、又「已」同とあるからには必ず其の「已」の上に「已」と同じ訓の單字なり熟字なりが無ければならないのであるが事實はさうで無くて「已」の直ぐ上の字は衍字であつて「止約反シタフ」とあるから「已」同とは關係があるとも思へない、然もかゝる字が更に三字續いて居りさて「以後ノチ」と云ふ語がある、そしてこれならば「已」同と關係をつけられる、即ち略號は後字の略、又同と云ふのは已後と書きても以後と同じくやはりノチと訓むと云ふ意味なる

事が判る、つまりこの所は丁寧に書くこと已後ノチ向後ユクサキと書かなければならないのである、又嚴密に云ふならば、以後の直ぐ次ぎに「後以後、已後、向後」と云ふ順序で記載せられなければならないのである、そして若しさう云ふ順序で記された時には略號の使用せられてある事も亦ノチと云ふ語の代りに「同」と云ふ語の使はれて居る事も許容する事が出来るが觀智院本の如き亂暴な書き方ではわれ／＼は著者の不穩當な態度を責めなければならぬと感ずる位である。然るにかゝる亂暴な書き方も高山寺本ではさうは成つて居らずして、後略向ノチユクサキ已ノチ以ノ同と正しく書いてあるのである。然も高山寺本の方が觀智院本よりも先きに出来たのだから名義抄の著者は正しい高山寺本を改めて却つて悪い觀智院本を作つた事になつてしまふ、そしてこれは甚だ不思議な事であると云はなければならぬ、従つて高山寺本の方が觀智院本よりも先きに出来たと云ふ考を全然正反對なものに變更しなければならぬ、音訓の注文に就いて云つても觀智院本には無くて高山寺本にだけ見えて居るやうな物も少々ある例へば

一ノ四 於何イツコニ、ソカ、イツクソ

(ソカは必ず誤りだらう)

一ノ八 像、又音サウ

一ノ二 避サトス

一ノ三 匪タケキツハモノ

一ノ四 朔ハナケツル

一ノ七 姐オコル

一ノ三 牝マケ

(一九ノ一)
(一〇二無)

六ノ六 他カレ

八ノ三 大焉オホイナリ

一ノ二 耶サシス、ム

一ノ四 觀ミル、オトコカムナキ

一ノ四 開カフル、アラハス

(一〇ノ三)
(一〇三無)

の如きがそれであるが、かう云ふ事も、高山寺本の方が觀智院本より先きに出來たと云ふ説に動搖を興へ得るものである。

さて右に述べた如き事實は如何なる理由より生じたものであらうか。普通の解説法に従へば、かう云ふ事實は其の書物に増補訂正の手が加へられた結果として生じたものと考へて差支へ無きものであり又さう考へるのが當然であるものだから従つて此の種の事實だけから論ずると高山寺本の方が觀智院本よりも前に出來たのであらう（假りに乙説と云ふ事に成り、既に論證したところの高山寺本の方が觀智院本よりも前に出來たに相違ないと云ふ説、これを假りに乙説と云ふ事は、正反對な説を得る事になる。）そしてかう云ふ説の出るのも無理ならぬ次第ではあるが併し此の乙説が正しいか

如何かは疑問である、高山寺本と觀智院本とは種類が異なるものである以上此の二種の本が同時に出来る筈が無いから何れかが先きに出来たに相違ない、であるから甲説が是であれば乙説は非であるし、乙説が是である以上は甲説は必ず非でなければならぬ。そして自分はやはり甲説の方の正しかる可き事を信じこれを主張したい、蓋し甲乙二説を比較するに、各々の説の論據となるものに量及び質の上に於いて差異があり、甲説の論據の方が乙説のものよりも遙かに優つて居るが爲めである。甲説の論據となるものは多いが乙説の論據たるものは餘り多くは無く、しかも甲説の

論據の中の第一、第二、第三、第四及び第七の如きは乙説には無き所のものである。かくの如くにしてやはり高山寺本の方が觀智院本よりも早く出来たと云ふ甲説を主張する以上は此の甲説に矛盾する如き事實即ち乙説の由つて来る其の論據を如何に説明したら可いであらうか。これを解釋するには大體左に述べるやうな三通りの方法があるかと思ふ。

(一) 高山寺本が出来てから觀智院本が出来た迄の間にはいくらかの時日があつた筈である、そしてかゝる字書を編纂せうと志す位の特志家の事であるから彼の智識慾は旺盛であるに相違ないであるから其のいくらかの時日の経過する間

には彼の學識も幾分増した事であらう、従つて彼が高山寺本を書いて居る際には記載する必要があると認めた事も、其の識見が高くなつた結果として觀智院本を書く時には、もう記載の必要を感じなくなる事もあらうし、又學識の乏しさから高山寺本を書く時に記載した餘計な注文を後になつてから取り除いた事も無いとは限るまい。

- (二) 觀智院本を書く際つい不注意から前の稿本——これが高山寺本其の物であつたかそれとも高山寺本を改修した稿本であつたかなど云ふ事は判らう筈が無いに麗々と記載してある注文を書き漏す事もあつたであらう、自分の原稿を淨書する際書き解めをしたり書き漏したりする事は誰にもまゝある事である。
- (三) なほ根據極めて薄弱ではあるが觀智院本の筆者が書き漏すやうな事も無いと云へないし、其の反對に高山寺本にも後人の竄入の絶對に無いと云ふ事が保證せられないのである。

これら三種の解釋以外にも解釋の方法が無い譯でもあるまいが兎に角右に述べた三種こそは最も普通な解釋と云へよう。但し既に掲げたところの乙説の論據が此の三種の中の何れの場合に屬するものであるかなど、云ふ細い事迄はもとより明

かになる筈が無い、唯かくの如く解釋しさへすれば甲説に矛盾する事實も別段甲説を主張するのに妨害とならなくなると云ふに過ぎないのである。

かくの如くであるから自分はやはり甲説即ち高山寺本の方が觀智院本よりも先きに出来たと信するのである。

六

ところでこゝに少し考へて見なければならぬ事がある、それは如何なる事かと云ふと高山寺本の著者と其の高山寺本に手を加へて觀智院本とした人は自分は同一人だと信じて居るが或ひは全く別の人では無かつたらうかと云ふ事である、換言するとこゝに人があり高山寺本を著はしたのであるが高山寺本が名義抄の最初のものであるかどうかとも明かで無いのだが假りに初稿と見なす(完成せず)に捨てゝ置いたので其の人の死後などに於いて——生前に於いて原著者以外の人が増訂を施す事が無いとは斷言出来ないが併し普通は原著者の死後と見るのが穩當であらう——其の友人が若しくは弟子とか云つたやうな關係の人が業を繼いで其の本に増訂を施して觀智院本を作り上げた(高山寺本から直ぐ觀智院本となつたのか、それとも此の二本の中間に位する一種又は一種以上の本があつたのかも固より不明で

あるがこれも便宜上高山寺本から直ぐ觀智院本が出来たのだと假定すると云ふ風の事情が若しや存するのではあるまいかと云ふことである。そしてかゝる疑は單なる疑であつて別に確かな根據がある譯でも無いのだが然し是れを正面から否定するのは案外にも甚だ困難である、蓋し一つの書物に人が増訂を施す場合を考察して見るに、増訂者が原著者と同じ人である場合も、別人である場合も、其の増訂の結果に於いて特殊の相違の現はれることは無いのである、若したまゝ現はれたとすると、其れは、原著者と増訂者とが異なる場合には、もとからある部分と増訂の部分とに矛盾する現象が生ずる位の事である、でかゝる現象の生ずるのを重要視する人は、原著者と増訂者との關係が不明の書を研究する場合に、かゝる矛盾する現象の有無を精査して、かゝる現象のある時には原著者と増訂者との別人である事を想像する事があるやうであるが、實を云ふとかゝる研究法も絶對的のものとは云へないや、やはり危険が伴うて居るのである、と云ふのは原著者と増訂者とは別人であつても其の増訂者が細心の注意を拂ひ得る人であるならば矛盾も生ずる事は無い、が其の反對に、同一人が増訂しても其の人が充分の注意を拂はない時には矛盾も生ずるからである、そして名義抄の如き複雑な字書に就いて云ふと、同一書中で前後矛盾する事があつ

ても不思議はない、だからもとの部分と増訂せられた部分とが矛盾しても其の事實は高山寺本の著者と其の増訂者即ち觀智院本の著者とが別人である事を斷定する理由となるには限らないのである、さてかくの如く書中の矛盾と云ふ事があてにならない以上われ／＼は原著者と増訂者との關係は唯増訂者の記録に依りて知る外、道が無いのである、従つて増訂者が何等記録を残して置かなかつた場合には全く原著者と増訂者との關係を知る事は不可能である。ところで高山寺本と觀智院本との場合では矛盾も少々見受けられはするが、今云つたやうにこれは重要視する譯には行かぬ、しかも一方では増訂者が誰であるかを教へる如き明文も無いのだから原著者と増訂者との關係はかうだと明確に斷言する事は不可能なのである、だが自分はやはり高山寺本の著者とそれを増訂して觀智院本とした人との同一人であつた事を認めて可からうと思ふ。と云ふのは名義抄の種類がたゞ高山寺本と觀智院本との二種だけしか無いと云ふ場合ならば或ひは原著者と増訂者との全然別人である事を想像し得る可能性もはるかに多いかも知らないが、然し名義抄には高山寺本觀智院本以外にも異本がある、一體高山寺本が名義抄の初稿であるかどうか不明であり、又高山寺本から直ちに觀智院本が出来たのかどうかと云ふ事も全く見當もつ

かぬ状態であるのだから、観智院本の出来る迄に既に三四種の本の存して居つた事を想像しても無理な想像とは云へない位であるのだが、さう云ふ種類の本の事は問題にしないともなほ一種西念寺本といふ異本もあるものであつて、しかも其の本は観智院本よりも更に後に出来て居るらしい物である、であるから若し高山寺本を増訂して観智院本を作りあげた人が、高山寺本の著者とは、別人だとすると、勢ひ、其の観智院本を作りあげた人は後に成つてから又もや観智院本を増訂して西念寺本を拵へた事になるのだが、かう云ふ事が果して實際ありさうな事であらうか、よしんば原著者と増訂者との間に親しい友人關係があるにしても退引きならぬ師弟關係があるにしても其の増訂者たる人は、元來自分の編述したのでもない他人の著書に再度も増訂の手を加へる面倒さに堪へるであらうか、由來増訂と云ふ事は校訂に劣らぬ位面倒な仕事でしかもやり映えのしないじみな仕事である。だから其の友人なり弟子なりが一度位ならば或ひは増訂を施す勞を取らぬとも限らないだらうが更に再び増訂の仕事に手を染める程に興味を持ち得ると云ふ事は頗る疑はしいと云ふ可きだ、彼としては高山寺本を増訂して観智院本を作り上げればもうそれで充分と考へるであらう、力の及ぶ限り推敲すると云ふやうな態度に成る事はまづ不可能であ

らう、そしてそれが即ち人情の自然なのである、で自分は原著者と増訂者が別人である場合には何かの事情で増訂者が一と通り増訂を施す事はあるにしても更にそれ以上を加へる事は先づ、無からうと考へる、所がこれに反し原著者と觀智院本を書いた人とが同一人である時はどうであらうかと云ふに彼が自分の著書に對して有する興味は他人が彼の書に對して有するものに比しては比較にならぬ程強烈であるに相違ないから彼は推敲に推敲を重ね、自分の著書を幾分でも完全なものにせんと努力するであらう、そしてこれも亦隨を得て蜀までも望む人の情なのである、信友翁が名義抄に異本のある理由を論じて、夫古籍有異本別本大不同者此不啻有寫誤而然己古人謙遜鄭重雖有著述不自爲是研究不措覆棺而後止云々と云つて居られるのを見ると、翁もやはり推敲に推敲を重ね成る可く完全な本を作らんと努力する著者氣質と云ふものを認めて居られる事が判る、要するにかくの如くであるから原著者と増訂者とが別人である場合には觀智院本が出来る事はあるかも知れないにしても西念寺本までが出来ると思へない、所がそれに反し同一である時には觀智院本の出来るのは勿論、西念寺本も出来、更に其の西念寺本を増訂したものが出来るのも可能であると云へる、これ自分が高山寺本と觀智院本とが同じ人によつて書かれた

事を認めんとする所以である。

だが願ると今迄述べた説明は實はまことに苦しい説明である、少し有力な反對説が出るならば一とたまりもなく崩壊しさうな説明である、然し乍ら高山寺本を増訂して觀智院本とした人は原著者とは別人では無かつたらうかと云ふ疑ひがそもそも根據無きものであるから右のやうな苦しい説明も相當有效であらうと思ふて居る。寛平年中に一通り出來た新撰字鏡が「自爾以後筆勢不捨集無輟」と云ふ風にして昌泰年中に於いて完成せられ、色業和名が増補せられて伊呂波字類抄の各本と成つた事に想到する時いつも自分は名義抄に異本のある事情が著者の旺盛なる研究心と、杜撰な書を作るまいとする學術的良心とに基因するものだと思像するのである。

(なほ此の問題については増訂者が原著者と全然關係もない他人では無かつたかと云ふ事も考へられるのだが、既に述べた通り、原著者の友人又は弟子で無からうかと云ふ疑ひが薄弱である以上、この最後の説の更に薄弱なのは容易に想像出來るから、今は願慮せずに置く)。

七

先きに出來た高山寺本には立派に書き載せられてあり乍ら後に出來た觀智院本

からは取り除かれて居る事項どもの中で最も注意を引くものは即ち高山寺本の卷初に見えて居る「佛寶類字書畧頌」である。一體此の畧頌は他の部首目次や觀智院本に見えて居る序等と同時に取り扱はる可き物で名義抄にとりては缺く可らざる要素の一つと云ふ風に解釋せられる程のものであるから、此の畧頌が一方に記載せられてあり乍ら一方には見えないと云ふ事は、本文中の單字熟字又は注文の多寡増減順序の相違と云ふ位の問題では無い、遙かに重要な問題である。とにかく畧頌が觀智院本では省かれて居ると云ふ事には必ずそれ相當の理由が無ければならぬ。

按ずるに畧頌が觀智院本に見えない事の理由は(一)著者が其の不注意から偶然書き漏したのか(二)高山寺本を書き上げて居る時には此の畧頌を記載する必要を認めたのだが、觀智院本を書く頃になると全く其の必要を認めなくなつたが爲めに故らに是れを省略したか(三)著者は觀智院本にも書き載せて置いたのだが後の轉寫者が不注意にも書くのを忘れたかの何れかであらうと想像せられるのだが併し此の中で(三)の場合は有りさうにも考へられない、と云ふのは此の畧頌は卷初に在るのだから寫し漏しが生ず可くも無いからである。そも／＼かなり大部な書を謄寫する際には謄寫者の興味や注意が平等公平であると云ふ事はあり得ない事である、謄寫の

業が進むにつれて次第に倦怠を感じるやうになりて緊張の度は段々と失せて行き注意力も散漫に成りがちである従つて謄寫の業に着手した當初は一點一畫をも疎かにしないやうな人も後には書き僻めをしたり書き漏しをやつたりするやうになり、しかも次第に増加する傾向がある。だがいかに亂暴粗忽の人でも卷初から書き漏しをして一頁を占めて居る如き畧頌を寫さずに置くと云ふやうな事は決してあり得ないであるから(三)の場合は想像出來ない。次ぎに(二)の場合に就いて云ふと(三)の場合に就いて述べたと同じ理由から否定出來ると思ふ蓋し著者にしたところで卷初に於いてはやはり其の興味は豊富であり其の注意力は強いのが普通であるからである。さてかくの如く(一)(三)の場合が否定せられる以上は、畧頌が觀智院本に見えないのは(二)の如き事情が存するのだと云ふ事になる。

然らば名義抄の著者は何故高山寺本には載せた畧頌を觀智院本に記載する必要を認めなかつたのであらうか。一體彼は爲愚痴に名義抄を編纂したのであつた、故に畧頌の如きやゝ便利なものが古くからある以上はそれを愚痴の爲めに記載しやうなものである、殊に、その畧頌に基いて部首の順序を次第したと云ふやうな場合には當然觀智院本にも其の畧頌を掲げなければならないのである。従つて彼はまさ

か畧頌を記載する必要を認めないと云ふ事はあるまい。だが然しこれに反して此の畧頌と云ふものが古くからあつたものでは無くて、彼がよい加減の順序で部首を配列してそれを何等深い理由もなく便宜上五字づゝに句切つたと云ふやうな事情がある、後になつてからさう云ふ句切り方の無意味なものを悟つて其の畧頌を取り除いてしまふ事はあるだらう。ところで其の畧頌なるものは既に前に述べた事もある通りに單に四十箇の部首を五字づゝに句切つて偈頌の形式にしたと云ふに過ぎないのであつて個々の部首の間に何ら有機的な關係が存する譯でも無いから、この畧頌の暗誦の困難なるは四十箇の部首を偈頌の形式とせず無茶苦茶に記憶する困難と比較して大差が無いのであるから、著者が後になつてから四十箇の部首を偈頌の形式に切る事の無意味なるに氣がついて取り除くやうになる事はさもある可き事故、自分は今述べたやうな理由から、此の畧頌の作者が名義抄の著者其の人である事を信せむとするのである。

八

最後に三寶類字集と云ふ高山寺本の名稱が如何にして觀智院本の類聚名義抄と變更したかと云ふ事について臆測をめぐらすに、著者は高山寺本を書く際には三寶

類字集と云ふ名稱の最も適して居る事を認めて居つたのであるが後になりて、それでは餘りに偏して居ると氣附いたが爲めに類聚名義抄と改めたのではあるまいか。